

した。【考察】自己抗体陽性の多臓器性内分泌障害症例で興味深い。

13) 化学療法後下垂体前葉機能の改善が得られた鞍上部 germinoma の1例

黒木 瑞雄・土田 正 (新潟県立中央病院)
斉藤 明彦 (脳神経外科)

症例は13才、女兒。無月経および頭痛を主訴に当院に紹介される。神経学的には鬱血乳頭が見られ、CT では鞍上部に腫瘍陰影を認めた。下垂体前葉機能検査ではPRL, TSH 以外はホルモンの分泌不全を呈した。腫瘍の生検術にて germinoma と診断。その後すぐに cisplatin, VP-16 の化学療法を定期的に施行し、8カ月後の現在、CT 上腫瘍陰影は全く消失した。また下垂体前葉機能を再検したところ、血清コーチゾールの反応が正常近くにまで回復し、LH, FSH もまだ十分ではないが

回復傾向を認めた。これまでの我々の経験からは、放射線治療が行われた鞍上部 germinoma の視床下部一下垂体機能の改善はさわめて悲観的であり、腫瘍の浸潤に加えての照射が内分泌の機能低下に追討ちとなっている可能性が危ぐされていた。本例はその点で興味深く、鞍上部 germinoma に対する従来の放射線治療に代わる、cisplatin を中心とした化学療法の有用性が示唆された。

II. 特別講演

「Corticotropin-releasing hormone (CRH) の臨床応用」

帝京大学医学部第三内科教授

田中孝司先生